

雑誌総合目録作成のあゆみ

加 島 民 子

(大阪回生病院図書室)

はじめに

昭和49年11月16日に近畿病院図書室協議会（以下協議会と略す）は設立総会を開き、歴史の第1歩を踏み出した。その総会で承認された事業計画の最初にあげられているのが現行医学雑誌目録の作成である。

「おたがいに貧しい資料を持ち寄ってみんなで使えるようにしようヨ！」この発想が協議会誕生の原動力であり、15年を経た現在でも存続させている大きな要因なのだろう。その証拠に、現在まで改版されて5冊発行されている雑誌目録のどれをとってみても、約40%の雑誌が協議会会員のうち1会員しか所蔵していない（ユニークタイトル）という事実がある。しかも欧文編初版での調査によると会員の82%がユニークタイトルを持っている。

協議会の年次統計では1病院平均170種の雑誌を所蔵している。現在コンピュータに格納されている雑誌は1876誌である。十倍以上の雑誌を会員は共有していることになる。目録作成は経費、労力ともにたいへんな事業であるが、発行の意義は大きい。

目録発行の概要

協議会はこれまでに雑誌目録を5冊発行している。最初に出した病院図書医療関係雑誌所在目録1975年版は誌名のABC順に雑誌を配列し、各雑誌ごとにその年に受入れている会員図書室を番号で表示した、いわゆる現行目録である。1977年にその後の2年間分の追加データのみをまとめたが、その補冊も現行目録である。

雑誌別にどこの病院が何巻何号から所蔵しており、そのうち欠号はどれかという情報を網羅した協議会全体の総合目録は1981年協議会活動7年

目によりやく欧文編が完成した。その後和文編を1984年に、さらに1987年に欧文編の第2版を発行した。

以上5冊の雑誌目録の概要を表にまとめてみた。この表で目録の変遷、編集作業の経緯を一覧していただきたい。それぞれの経過については、各目録の序文あるいは会報総会号に詳しく報告されている。ここでは15年を顧みて記録に残したい事柄をピックアップしてみた。

はじめの目録

設立の翌年に出した目録は1975年現在各会員図書室で受入れている雑誌のリストである。蔵書整備のできていない図書室も多く、まずは手早く作ろうということで、バックナンバーの有無を度外視して発行した。編集協力者の関西医大図書館の竹重純子さんには、実際の作業についてアドバイスをいただいた。

調査は比較的多くの図書室で受入れられていると思われる雑誌650余種を選んでリストを作成し、会員にチェックしてもらおうという方法をとった。編集段階でカード整理方式を取り入れた。

欧文雑誌の版下原稿は経費節約のため大阪通信病院の山口タツ子さんが英文タイプで作成した。当然文字は英数字しか使えない。それで所蔵会員の表示を番号制にした。この方法は総合目録欧文編初版でも採用している。コンピュータで編集するようになって、会員表示は漢字3文字の略称になり、見やすくなった。

なにしろ協議会には事業計画はいっぱいあったが、お金は殆どなかった。この目録の会計はどうも協議会会計とは別個にしたようだ。200部発行して、会員には1部800円で2冊割当て、会員外には1部1000円で頒けている。全国の大学医学

図書館や病院、書店などに申し込み書付きの案内を出して売り込んでいる。恐れ多くも津田良成先生には6冊届けて2万円も寄付を頂いている。この遅しさと何とか採算がとれ、おまけに第8回研修会の講義録「医学研究と文献探索」（奈良医大の吉本瑞応氏）の印刷代まで賄っている。

この編集と同時にアンケートで複写設備の有無、機種、複写料金等について調査し、この時点で相互貸借料金を統一している。ゼロックス1枚35円、電子リコピー1枚20円である。電子リコピー料金はなくなったが、コピー1枚35円は15年間据置である。現行目録とはいえこれで協議会の相互貸借は一応の体制が整い、翌年に開始した相互貸借調査によると1年間に396件の文献が協議会内で貸借されている。

この初めての目録に参加した病院は当時の協議会36会員のうち34会員で、その後に出したどの目録より成績が良い。

総合目録完成までの長い道程

そしていよいよ念願の総合目録の編集に着手し、昭和56年に欧文編が完成した。協議会の総合目録には2つの特色がある。ひとつは調査期日である。文部省や医学図書館が発行する目録の凡例には調査期日何年何月何日と日付まで限定されている。これが普通である。ところが協議会の目録の凡例をみると、欧文編初版では「昭和53年10月の調査開始から昭和55年の6月まで」、和文編は「昭和56年8月の調査開始から昭和59年1月まで」、欧文編第2版は「昭和60年9月の調査開始から昭和61年7月まで」となっている。会員からの目録データの回収にこれだけの時間がかかっているのである。実にはずかしく、実に正直な記述である。自分の図書館にある雑誌の実態を把握できていないという事実とその整備に費やす時間がとれない勤務状況を如実に露呈している。

もうひとつの特色は雑誌の欠号表示である。総合目録は何を所蔵しているかのリストであって、何が欠けているかというデータを記載するのは亜流である、と医学図書館のひとに注意されたことがある。それでも協議会の目録は「何巻何号から所蔵しています。ただし何号と何号は欠号です」

と欠号を別記する方式をとり続けている。理由は欠号データが多すぎて、所蔵データのみで記載すれば、欠号の都度一旦区切って長々と書きついでいかねばならず、利用するのに非常に煩雑になるからである。欠号が多いというのも病院図書館の実態である。

そんな訳で目録作成で最も時間がかかるのが、目録データの回収である。その間に新しく会員が入会してくる、新しい雑誌が創刊される、古い雑誌を廃棄処分する図書館がでてくる。これらの状況も真面目に受けとめて、ますます作業が増し、遅れがひどくなる。データが出揃うまでの待ち時間は編集作業の内でも最も精神衛生に悪い。

来年度は欧文編、和文編ともに改訂する予定である。既に前の版のデータはコンピュータに格納されている。追加、廃棄の修正データのみ調査すれば済む。やっと長い長い調査期間から解放されるであろう。

手作業編集からコンピュータ導入へ

欧文編初版は版下をIBMのタイプライターを持っている図書館で分担して作成した。予算がなかったからである。欧文はなんとか自分達で作ることができた。問題は次の和文編の版下をどうするかである。会員からのデータもほぼ揃い図書カードによる整理作業も終えた段階で立往生してしまった。どう見積っても版下を業者に委託する予算はでない。雑誌名等の日本語部分だけ委託して、所蔵データはタイプで打つというのも、煩雑がかえって経費がかかるかもしれない。それじゃあコンピュータを利用して、入力を自分達でするのはどうだろう。改訂版を出すにも便利だし、……という軽い乗りで、経費の節減をきっかけにコンピュータ化に切り換えた。もしワープロが今のように普及していたら、おそらくコンピュータは導入できていなかっただろう。

私の病院では1973年からコンピュータを使っており、私も少し触ったことがある。電算課の竹田和弘さんに、気楽に相談したところ、「今時コンピュータを使わない手はない」と二つ返事をもらった。もうひとりの影武者は当時阪大の中之島図書館におられた中嶋間多さん。図書館とコンピ

ュータ両サイドの専門家で、発想の大胆さと粘り強さの持ち主である。彼の協力がなければ成功していなかっただろう。

中嶋聞多さん、竹田和弘さん、目録責任者の湯浅伸一さんに私の4人で、「やりたいことができなくてはコンピュータじゃない！」とコンピュータに鞭打ってシステムを作りあげた。私が能天気なファイルは4つに分けたいなあという、所蔵・欠号・書誌・会員機関の別々のファイルを作ってくれた。機関コードは日本全国どこの図書室でも仲間に入れるように、都道府県コード2桁と県別に999病院まで受け入れ可能な3桁の計5桁にした。これは便利と得意になって、病院図書室研究会の後藤さんに、よければシステムをお使い下さいと誘ってしまい、今のところ予定はないとお断りをうけた。中嶋さんからはまだまだ欲ばったアドバイスをいただいたが、私の頭がオーバーフローして取り入れなかったこともある。システム設計は本当に楽しく進んだ。その後待っていたのが、恐怖の入力だった。

入力の業者委託

ワープロが普及していなかったから、コンピュータを導入できたと先に書いたが、ワープロ未経験者がいきなり和文雑誌の書誌事項を日本語で入力することの大変さは想像以上であった。しかもコンピュータ端末機が使えるのは、5時以降と土曜日曜に限られていた。会員を動員して必死で入力し、15日間で4つのファイルすべてのデータの入力を終えた。このすさまじさの後遺症でボケやウツの症状に陥った者がおり、目録シンドロームと診断名をつけた。

和文編発行の翌年には、欧文編のデータが実情に合わなくなってきたので、改訂版を作成することになった。目録シンドロームもおさまり、コンピュータ編集の便利さが有り難く、「初回だけ頑張って入力すれば以後の改訂は楽々」と、気をとりなおし、今度はパソコンを使って、設置している会員による分担入力を企画した。しかし書誌データ（1レコード824桁）の入力がパソコンでは難しいということで、またまた編集半ばで方針を変更し、思いきって入力を業者に委託することにし

た。次回からの改訂の労力や経費の減少を予想すれば、採算は合うだろうと見積った。さすがに編集作業は楽になり、編集委員3名でほぼこなせた。

コンピュータ・ファイル管理センター

現在大阪回生病院のコンピュータには総合目録のデータが収まっている。ちなみに書誌データ2252件、所蔵データ9279件、欠号データ9754件、機関データ64件である。これらのデータを有効に利用すべく、協議会は会員委託サービスのひとつにコンピュータ・ファイル管理センターを加え、当院にサービスを委託している。会員からのリクエストに応じて、各図書室の雑誌所蔵目録の打ち出しや、所蔵統計の資料などを提供している。

協議会の長年の懸案である分担保存もいよいよ本格的に取り組むようである。この調査にもコンピュータ・ファイルの活躍が期待されている。なによりも、来年度の事業計画である目録の改版で発揮されるであろう威力を楽しみにしている。

これからの課題

ここまで筆を進めてみると、すべての目録に関わった私としては、よくやったなあと懐かしく、もうなにも言うことはない。それなのに協議会生活15年の習い性で、終章となると思わず「これからの課題」とタイトルをつけてしまう。そして確かに課題はあると納得してしまう。

1. 現行所在目録の発行

総合目録は1981年以来3年に1回のペースで欧文と和文を交互に発行してきた。この間隔は協議会の事業としては精一杯である。しかし、目録データの信頼性からみると長すぎる。会員の入会、各図書室の購読雑誌の変更、雑誌の廃棄などで毎年かなりの変動があると予測される。相互貸借のツールとしては不満がある。そこで総合目録の改版までのつなぎとして雑誌現行所在目録を発行することを考えている。

2. 会員外の目録参加

総合目録の改訂に際し、会員外から収録してほしいという希望が届いている。システム的には受け入れ体制はできている。ただし、目録作成作業は協議会の会費と会員の労力で賄う事業

である。組織の問題とも関わるので、慎重に考えなければならない。

3. オンライン時代の目録

世の中はオンライン時代である。文部省の学術雑誌総合目録はオンラインで利用できるようになっている。協議会の会員からも目録ファイルをオンラインで使えないだろうかとの相談を受けたことがある。毎日オンラインサービスを提供することが、どんなに大がかりなことか知らないから言えるのである。富士通の人に聞いてみたが、ホストコンピュータのランニングコストだけで、とてもお話にならない金額である。しかしパソコン通信のレベルでは可能かもしれない。コンピュータ・ファイルのデータを定期的に更新し、リクエストに応じて処理を行い、回答をパソコン通信で送る。この程度なら夢ではないだろう。

目録のコンピュータ化はもともと冊子体の目録発行が目的であった。コンピュータ検索用としては不備な点がいろいろある。システムの改良もこれからの課題になるであろう。



近畿病院図書室協議会発行の医学雑誌総合目録

	1	2	3	4	5
目 録 名	病院図書室医療関係雑誌所在目録 1975 年版 近畿病院図書室協議会 加盟病院 1975 年度受 入雑誌	病院図書室医療関係雑誌所在目録 近畿病院図書室協議会 加盟病院 1976・1977年 度受入雑誌欧文雑誌追 加版	近畿病院図書室協議会 医学雑誌総合目録 欧文編	近畿病院図書室協議会 医学雑誌総合目録 和文編・国内欧文編・ 華韓編	近畿病院図書室協議会 医学雑誌総合目録 欧文編 第 2 版
発 行 年	1975年	1977年	1981年	1984年	1987年
参加会員 当時会員数 (参加率)	$\frac{34}{36}$ (94.4%)	$\frac{33}{38}$ (86.8%)	$\frac{44}{54}$ (81.5%)	$\frac{47}{60}$ (78.3%)	$\frac{51}{64}$ (79.7%)
大 き さ ・ 頁 数	B5版 68頁	B5版 27頁	A4版 149頁	B5版 188頁	B5版 225頁
収 録 誌 数	欧文誌 464 和文誌 349 計 813誌	130誌	854誌	863誌	1,013誌
発 行 部 数	200部	会員のみ	200部	200部	200部
価 格	会 員 800円 非会員 1,000円		会 員 5,000円 非会員 6,000円	会 員 5,000円 非会員 6,000円	会 員 5,000円 非会員 6,000円
編 集 委 員	福味美津子(国立大阪) 北沢 洋子(国立大阪) 千住とも子(日生病院) 山口タツ子(大阪通信) 編集協力者 竹重 純子(関西医大) 加島 民子(大阪回生) レイアウト 山室真知子(京都南)	山口タツ子(大阪通信) 山室真知子(京都南)	編集責任者 小田中徹也(国立京都) 石川 尚子(住 友) 泉谷 嗣郎(大阪日赤) 加島 民子(大阪回生) 北沢 洋子(国立大阪) 北村 きみえ(松下健保) 首藤 佳子 (星ヶ丘厚生年金) 千住とも子(日 生) 西村 和代(京都南) 秦 千絵里 (宇治徳洲会) 浜口 恵子(高槻日赤) 林 伴子 (社保神戸中央) 松本 純子(住 友) 山口タツ子(大阪通信) 山室真知子(京都南) 湯浅 伸一(行岡学園)	編集責任者 湯浅 伸一(行岡学園) 安達貴美子(西 淀) 池田 和代 (京都第1日赤) 石川 尚子(住 友) 泉谷 嗣郎(大阪日赤) 大音師淳子(阪 和) 加島 民子(大阪回生) 北沢 洋子(国立大阪) 黒川 淳子(耳 原) 小田中徹也(国立京都) 小山 弘子(田中外科) 中村 雅子 (府立母子センター) 西村 和代(京都南) 秦 千絵里 (宇治徳洲会) 浜口 恵子(高槻日赤) 林 伴子 (社保神戸中央) 松本 純子(住 友) 山室真知子(京都南) 編集協力者 大庭 盛吉 (大阪回生電算) 竹田 和弘(") 中嶋 聞多(阪大中図)	編集責任者 加島 民子(大阪回生) 石川 尚子(住 友) 下浦 敦子(国立大阪) 編集協力者 伊藤 摩知(西 淀) 小田中徹也(国立京都) 竹田 和弘 (大阪回生電算課)
	計 7名	計 2名	計 16名	計 21名	計 6名
編 集 期 間	5 ヶ 月	不 明	3 年	2 年 半	1 年 半
編 集 作 業	調 査	主な雑誌のリストを配布し、各会員が受入れている雑誌をチェックする方法。	1.の所在目録を基に、新規受入雑誌、受入中止雑誌を申告する方法。	3. と 同 じ	コンピュータ編集用の総合目録データシートに1雑誌1枚ずつ、所蔵欠号データを記入する方法。
	編 集	1枚のカードに、1雑誌の誌名、出版地、受入れている会員名等を記入して誌名のABC順(欧和別)に配列。	1. に 同 じ	3.と同様に整理した後、コンピュータ編集に切り換え、書誌データシート、会員機関データシートを作成。使用コンピュータはFACOM M-320、ファイル4種類。データ入力には編集委員が受け持った。	コンピュータ編集、データシート4種類(総合目録データシート、書誌データシート、欠号データシート、会員機関データシート)。入力は業者委託。
	版 下	欧文のみ編集委員がタイプを打った。和文は委託。	編集委員によるタイプライティング。	編集委員によるタイプライティング。	コンピュータ
発 行 経 費	9,1868円	6,700円	468,677円	445,990円	547,062円